

佐伯藩「藩医考」

我が家の古文書から

小野 ミヤ子

(会員 佐伯市向島二丁目)

「相馬御風とその妻」という本に藤田茂吉について、林家より藩医藤田家へ養子に出たと書かれています。ここで私は幕末の藩医についてさがしてみましたが、藤田姓では藤田太白と藤田俊詰の二人がいました。どのような関係の人かはわかっていませんが、太白の年令が高令であったようで、最近藤田太白について知ることができました。

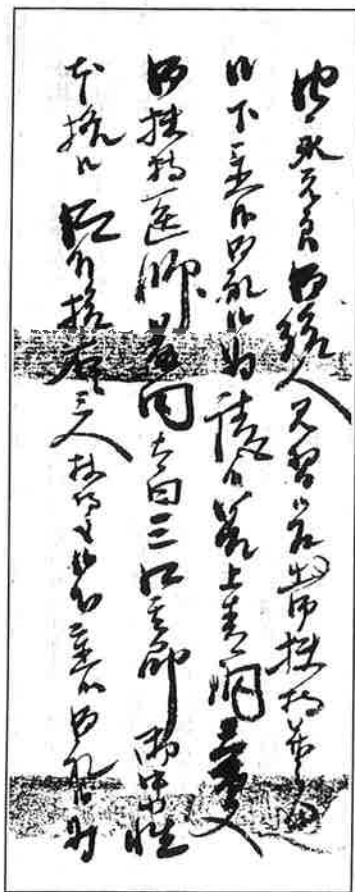
明石市に住む、佐伯藩出身で私と同姓の小野さんという方が一族で、先祖供養をしているとのこと。海崎には以前住んでいた家も当時のまま残っており、

墓地は万休院にあると聞きました。

藤田俊詰については、明治初年の佐伯藩地図に、向島二丁目の我が家から一と町広小路寄り(附図参照)になっています。

藩医について一枚の古文書を見つけました。それは私方の襖の下張りにしていたもので、何人か藩医の名が出ており、その中に三江元節みづえもあります。誰でも自分の家のルーツについては、口伝による話として聞かされたりしていると思いますが、証明された文書でもあれば実証され、史実を知ることができると思います。

先に大分合同新聞や佐伯地方の先覚者、古藤田太さん



襖の下張りにしていた古文書

の書かれた本を読んで、私は山田俊郷の足跡も知りまし
た。古藤田さんに三江元節の名前が出ている古文書がみ
つかりましたとお話したところ、大分市に三江家の方が
住んでいることを知らせて下さいました。

私は少しでも我が先祖のことがわかればうれしいと思
っていたところ、やがてその方とお話することができま
しました。大分市金池に住む賀来キミ(会員、旧姓三江)
さんです。御主人が歯科医で入院中、看病している頃に、
大分合同新聞で「佐伯地方の先覚者」を読んで驚いたよ
うです。自分の先祖である由を古藤田さんに伝えたよう
で気にはなっていたとのことでした。

キミさんは、私に逢って是非お渡ししたい、見てほし
いものがあるといつて数枚の古文書を送って下さいまし
た。また、自分は両親と早く死別し、佐伯からは小学校
低学年の頃に出て、思い出は久成寺の池でカメを見て遊
び、父親の勤めていた佐伯郵便局へ弁当を届けていたこ
とが深く残っていると話していました。自分の家の昔の
ことも父親は話さなかったようです。

四国在住の三江家の方にいただいたという古文書を、
親族で前佐賀大学長の首藤格次郎さん(日田市在住)が

解読されたという数枚の古文書が私のもとへ届きまし
た。古文書は善教寺布岳小栗憲一師が(別紙)書かれた
ものです。

私は何かのご縁と思い、三江家の居住地跡を探してみ
ましたところ、今は寿屋の駐車場横に在るみのりや金物
店が、当時の三江家そのまゝで残っていることを知りま
した。古文書の三江元節五十年祭に修理されたという家
です。私はこのことを知ってから、前を通るたびにいつ
までも残して置いてほしいと思いつつ見えています。こ
わされるのが不安でなりません。

また、三江家が因尾村で開業していたと書かれていま
すので、因尾はどこだろうかと思ひ、昔「因尾の山奥」
といつて友人が佐伯で下宿生活をしていたことを思い出
しました。佐伯藩の歴史書をさがしてみたところ、堂の
間という所に三竈江神社があるのを知り、もしかしてこ
の村かも知れない。ちよつと上品で歴史のありそうな村
という気がしました。そこで教育委員会に尋ねましたと
ころ知らないといわれ、土地の長老で歴史に詳しい羽柴
栄さんを紹介して下さいました。

私は一泊のつもりで宿のあるのも確かめた上、バスで

出かけました。堂の間には羽柴栄さんと瑞祥寺の和尚さんが待っていて下さいました。三江家があったとこのことで私も期待していたのですが、寺には何も残されてないとのことでした。

三江家は三竈江神社の右手の高台に屋敷跡があり、終戦後まで古い草ぶき屋根の家が残っていて、代々三江を守る方がいたとのことですが、養子が戦死して現在には柳井さんという人の住居になっていました。しかし、私の見る三江家は昔の栄華を思わせるような場所でした。

その時私はふと裏山に目を移しますと、こんもりとした森の中に小さな庵のような屋根が見えましたので、羽柴さんに是非行ってみたいと話して登ってみましたら、古文



三江家本尊の庵

書の中に
ある『此
の本尊は
当時元節
の蔵する
ところに
して、三
江代々崇



三江家本尊前の石碑の前で羽柴栄さん

まいりました。また、建物の左側前には石碑があり、碑には歌詞が刻まれ、三江元節の名が残されていました。

堂の間はその昔、平光世、光国兄弟が緒方惟栄の追手の者によりこの地に戦死、「身を構え」切腹して果てたという身構えから、三竈江大明神として祀ったと史実に基づいた由緒ある神社とのことで、私はなぜか三江の歴史に愛着を感じました。

帰途は歩いて高野大庄屋跡もみせて頂きました。山奥と思つた因尾村にこんなすばらしい歴史の舞台があったのかと思ひながら日帰りの旅になり、羽柴さんに感謝しながら帰って来ました。

敬する所
なり「云々」
の場所
でしたから、
私はもう
うれしく
なって感
激してし

その夜早速キミさんに今日一日の様子をお知らせして
よるこんで頂き、私も良かったと思っています。

それから暫くして、キミさんが佐伯へ尋ねて来ました
ので、昔の三江家や因尾村まで案内して、前と同じコー
スで羽柴さんにも来て頂きました。三竈江神社の境内で
は、老人クラブの人達がゲートボールをしながら「子供
の頃、三江先生に灸をしてもらった」「三江の田植えが
終わると村内の田植えが始まる。皆さんが手伝って一番
先に植えた」など昔の話をして下さり、キミさんもなつ
かしそうに聞いていました。

帰りには市内にある墓地に行くといつて三江家本尊の
水を汲んで持って帰り、墓地には私もついて行きました
が、夕方でしたので足元には随分気をつけていたように
思います。

墓地は史談会の初歩きで知っていた白坪に、今泉元甫
の墓地と並んで建てられていましたが、三江家のは新し
い墓でした。古文書に書かれているように、京より今泉
元甫について佐伯に来て、墓地も今泉家と同じ場所にあ
るといふ、昔の人達の義理人情の深さに頭が下がる思い
で一杯でした。

夕食はお父様の弁当を届けたという思い出の地近くの
すし屋ですませて、お別れしました。

あれから二年にもなり、雑用に追われていた毎日でし
たが、最近になって私が入会している大阪の「歴史と文
化と産業」という雑誌の特集、「今に生きる 安心の
哲学」72号に、大阪の女と題して明誠舎々主、竹中靖一
氏を語る「竹中芳子夫人を訪ねて」を拝読しました。と
ころが、この方こそ佐伯藩医三江元節の弟子、山田俊郷
の曾孫であつたのです。

私も娘が大阪の大学へ行かなかつたらこのような方々
に出逢えなかつたと思います。人と人との縁を大切に
して、これからも生きていこうと思つています。楽しい
歴史の一ページがめくれます。今泉元甫は城下の人々の
為に井戸を掘つたり、佐伯地方にも心学があつたのでは
と思うような教えを残してくれました。山田俊郷につい
てもいろんな資料を竹中さんから頂戴しましたが、曾祖
父の修理した家が今も残っていることには驚いていたよ
うです。

一貫代本尊有證如上人之裏書傳云在昔羽州武士某有故出家歸真宗建道場於泉州岸和田堤村其子円節乞本山爲一寺永覺寺是也円節子元節不好爲僧還俗稱姓三江適佐伯藩醫今泉仙甫在京見之着愛特篤携歸而授醫術使開業於因尾村此本尊即當時元節之所藏而三江氏代々所崇敬也山田醫伯與三江氏有舊見本尊之歲月毀損改施裝潢而裏書文字磨滅僅存釋證如三字及華押髮髻可見而已今茲明治丁未六月山田翁從大坂歸省修其師元節氏五十年祭橋此本尊來而乞余記其事余固欽翁之仁人且喜本尊之經三百餘年而金容儼然毫無損害因記所聞以還之

布岳小栗憲一



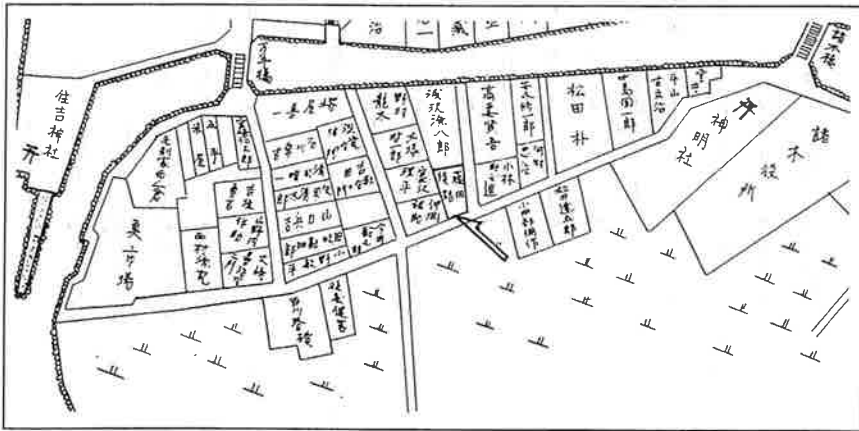
一貫代本尊は證如上人の裏書有り。伝へ云う、在昔(むかし)羽州の武士某(それしや)故ありて出家し真宗に帰し、道場を泉州岸和田堤村に建つ。其の子円節本山に乞ひ一寺をつくる。永覺寺是なり。円節の子、元節僧となるを好まず、還俗して(俗人となつて)姓を三江と称す。適、佐伯藩医今泉仙甫京に在り、之を見て眷愛(目をかけ「いつくしみ」愛する)特に篤く携え歸りて醫術を授け、因尾村において開業せしむ。此の本尊は即ち當時元節の藏するところにして三江氏代々崇敬する所なり。山田医伯、三江氏と旧見有り。(旧い知りあいであつた)本尊の歲月毀損(年とともにきずがついて、いたんだこと)裝潢を改め施す。(表具を施す。潢は紙をそめること)しこうして裏書の文字磨滅して僅かに釋證如の三字及び華押(花押かきはん)を存し、髮(髻と書くべきを誤つて書いたのか)髻として見るべきのみ。(はつきりと見えないことを意味している)今ここに明治丁未(明治四十年)六月、山田翁大阪より



解説 首藤格次郎 (元佐賀大学長 日田市在住)

帰省し、其の師元節氏五十年祭を修し、此の本尊を携え来りて、余に其の事を記さんことを乞う。余もとより翁の仁人なるをうやまい、且つ本尊の三百余年を経て金容儼然として毫も(少しも)損害なきを喜び、因って聞くところを記し以て、これを還す。

布 岳 小 栗 憲 一



藤田俊詰邸 (矢印)